

うたっているようだ。現在が過去の延長上にあることを思うと、東日本大震災を体験した作者ならではの深い感慨が読める。

木蓮の花を煮つめて出来あがるをんなのやうな雄猫の  
岸並千珠子  
の聲

木蓮の花を煮つめたよな女の声とはどんな声か？  
女のような雄猫の声とはどんな声か？ 二つの「？」の  
重なりで、できあがった一首。工夫は買うが、味が濃す  
ぎるといふか、ややどぎつい感じもする。しかしまあ、  
恋猫の歌だからいいか、そんな感じである。へ恋猫の恋  
する猫で押し通す 永田耕衣、へ恋猫と語る女は憎む  
べし 西東三鬼、など、味の濃い俳句を思い出す。

離れたらあなたが覚むる左手の力をすこし弱めつつ  
眠る 萩野聡

やさしい、やわらかい恋の歌。今つばい若い男性の恋  
歌独特のやさしさと見ていいだろう。

草食みて雲も食むなり島山羊は海を見下ろす断崖の  
上 浜田ゆり子

「島山羊」は野生化した山羊で、奄美・沖縄地方の呼  
び名。海に面した切り立った断崖の上の山羊をイメージ  
すればいいだろう。言葉のローカルカラーをうまく生  
かした下句、うまい。

ほろほると写真のわれも笑いおり五目ごはんの湯気  
の立つ卓に 菅田恵子

明るい空気をうまく定着させた下句に注目。この一首  
だけ読むと、幼い頃の写真に取材しているようだが、今

月の一連の他はすべて恋の歌なので、これもその文脈で  
読むべき歌のようだ。つまり写真には、彼も写っている  
のであり。「写真のわれも」の「も」はその意味。

町の上とほく見晴らす山々に雪をみとめて陸橋くだ  
る 松橋雅実

ほんの少し高いだけだが、日常とはまったくちがう展  
望にめぐまれることがある。なんとなくほっとしたよう  
な、懐かしいような感じが読めるのが持ち味。この作、  
どこの町での作かで、ずいぶん印象がちがうだろう。

北国のあかあか月夜の女たち古裂切りさきむかし織  
りこむ 桐谷文子

「古裂」とは、基本的には、江戸時代以前に外国から  
入ってきた金襴・緞子などの布地をいうが、今は一般的  
に、美しい古い布片の意味に用いている。日本昔話のよ  
うな空気が楽しい。

揺らがざる国本武春いつぼんの歌う木のように丘に  
立つ 駒田晶子

NHKのEテレの「にほんごであそぼ」で、「うなり  
やべん」役を演じていた浪曲師・故国本武春さんに取  
材した今月の一連である。国本武春はユニークかつ魅力  
的な人物で、ロック・バンドなども共演していた、私  
も映像で知っていた。昨年暮れに倒れ、五十代で急逝し  
た。この一首、国本武春への讃歌として魅力的だが、故  
人を現在形でうたうのはやはり問題。作者がいまDVD  
を見ている場面とか、なんらかの仕掛けが必要だったろ  
う。